

能楽参考資料

提供 西村 淳

謡曲 名つくし

此の謡曲の「名つくし」は私の故郷の旧家の土蔵の中
から他の古文書とせよ日本残のこよりとらで虫喰の
状態で見えたりあり多 巻末に明治三十二年春
七月九日何某とあり事すが判読し難く早名で字名
ではあいもよくならずむづかしい状態からで書かされていま
すが内容が面白いので現代文字に書き直しし被を流
に曲付けて製本したためです 原文は工一菊松老師
を頼んで苦大を調査してもらいやりた毎宝生師のあ
らう！といふこと、私の叔父は祖父の代より宝生師に属して
おり父の代から歌者に変わっています 本書の製作

に当りて故庵山新氏に
全面協力を頼ひまた
制本下等で

佐伯圭史氏その他の方々

の力を証まらうといたしま
す感謝いたしませぬ

昭和五十七年三月

青本一紀

謡名つし

次第下^{7年}はめて腰のうたひ出す。はめて

腰のうたひ出す。是を次第と

いふとかな。是は謡曲を好む者

にては。いまだ未^{7年}ま事をなせず

は程に。せめてはその名目をたに

知らばやと思ひは程に。此度能樂

合を聞かれ候より義り之間。今

日は能樂を主越。を(を)請け

と存^マひ

道行^上道行や。みちの教をうけはやと。

みちの教をうけはやと。あまりに

ふも教^のらずしてさうりさうりと

ふたひゆく。此打切をうたすまで。

腰座にけやく着^{7年}まにけり。腰座に

けやく着^{7年}まにけり。腰座に

急ぎは程に。是は腰座に着きて

此郎にてシテの出るを約たはやと

存^マひ。仕手が謡のはりなり。

づかに声をけりある。

此郎の謡をサシといふ。サシはサシ

の調子あり。又その位を心し

下^{7年}歌は調子をさげてのうをつけ

へばやかてあげ歌よ。

上^{7年}歌は調子をあげてふなり。

調子をあげてふなり。シテ

調子をあげてふなり。シテ

ツレのある時は返しばかりはツレひとり
たふか習ひなりけり。さても能楽
のかくげかり。ひらけゆくをぞ有難き
ひらけゆくをぞ有難き。

是は謡曲もぬむ者にてはが。いまた
是は謡曲もぬむ者にてはが。いまた

其の名目をたよ知らばと思ひは
間敷へて給はり候へ。

只今老翁のくだひ給ふをまなから
うかがひに。一せいといひサシといひ。

3

又上歌下歌ふとと奇しくありたい
候が。あのことを教へて給はり候へ。

是は謡曲には。其名目も
あまたありて。大方は習ひ本にも
記してあれば。そのうちよりひとつ
いとお尋ね候へ教へて候へん。
先づとらうくにイロとふ事あるは

いかなる事にて候ぞ。仰せあるごとく

是は郎をにああるなりとも。先づ

弱法師にては。飛上門に向ふは事か。

是がイロの諷ひ様なり。スエとそふ事は

程までや間近ますか。山斯様に

いひする事なり。解またかんとするは

それはカカテ諷ふ方の名なり。

4

今、あかの混ひ給ひしも、
 終るや、^地此外にもた名目はあまたあり。また名目
 はあまたあり。かく同音に混ひまは
 初同といひて地謡のほめてうたう名
 なるぞや、^甲此上はクリヤクセロソギに
 キリのうたい様、拍子にてはトリオクリ。

本地に片地ヤラヤラバ、
 一めたり混ひてきかせ申すべし。
 変れクリのほめは、^不声高々にして
 くれや多くあり。此の終りにある
 ホンクリとよめるのは、すなはち是なり
 是よりサシとよめるにて、一セイの
 後のサシとおなじりのなれども、これ

また混ひやりにかゝる事あり。此サシ
 の跡をせとふ、^中抑クセとよめるは、
 かのあげせげまかなり。又間拍子
 を心におきて、たよ、^甲トリとヤラの
 間を先づおぼえ、このヤアの間を習ひ
 此のヤの間み、かくてヤラの時は長
 ひく、^甲是をヤラバの間。またつす間と

申すなり、^上上端はシテばかり。声
 ほりあげて混ひなり。同、^上片地と
 よめるは、^不合はミツチとある。すなはち
 後の間合なり。おくりは、ミツチにおく
 る。上、^上ロンギとよめるのも、混ひてきか
 せ申す、^上ロンギとよめるは、^上あは
 しかに混ひ、^上あは、^上ロンギとよめるは

シテとワキ。たがいに論議する名なり。

されども櫻のふすまはおほくは地にて

諷ふなり。地下室にや香あり。まことわりを

きくにつけても。ありがたや。なほおほくは

終(か)り。

此上は後シテの出るをまうや待(た)らば

四拍子は早笛や。出羽にサカリは大(大)シに

つれもシテの出る時のあなり。

扱又舞は何ぞぞ。そ名をまかせ

終(か)り。

先づ舞の名は男舞 神舞 序

の舞 中の舞。早舞 羯鼓 樂

神樂。端の舞。カケリ舞 働

地(ち)り(り)と(と)り(り)あ(あ)ら(ら)ど(ど)も(も)早(はや)は(は)ま(ま)た(た)ゆ(ゆ)る(る)

ゆる(ゆる)閑(かん)せ(せ)申(ま)せん(せん)と(と)。

に(に)老(らう)翁(う)は(は)幕(まく)の(の)ら(ら)ち(ち)に(に)ぞ(ぞ)い(い)に(に)ける(ける)。

あ(あ)ら(ら)の(の)内(うち)に(に)ぞ(ぞ)い(い)に(に)ける(ける)。

の(の)謡(うた)は(は)か(か)く(く)て(て)キ(キ)リ(リ)の(の)謡(うた)は(は)。

け(け)は(は)先(ま)づ(づ)是(こゝろ)に(に)て(て)諷(ふう)ひ(ひ)細(こ)め(め)たり(たり)。

室(むろ)に(に)此(こ)道(みち)の(の)榮(さか)ゆ(ゆ)は(は)。

の(の)め(め)み(み)なり(なり)。

あ(あ)ら(ら)の(の)め(め)み(み)。

此(こ)の(の)謡(うた)曲(きょく)は(は)き(き)。

一(ひと)見(み)と(と)り(り)そ(そ)の(の)に(に)。

試(し)み(み)也(なり)。

謡曲心得四十八條

い	イロの表現ほどほどに	一セイは節をタツプリ、ゴマ運ぶ
ろ	呂音は下音より低く腹声で	ロンギでは大事な地渡し、シテ渡し
は	番数よりも正しい謡	ハルの後の下は下げない (ツヨ吟)
に	日曜のラジオの謡で耳肥やせ	二度続いた下は下げる (ツヨ吟)
ほ	本に頼らず心で謡え	本ユリの引き三つとる半ユリ
へ	下手な謡を聴けば為になる	下手でも臆せず声を出せ
と	所嫌わず稽古に励め	同吟は調子合わすがまず大事
ち	地謡は地頭に従って	中のあとの下は下げる (ツヨ吟)
り	力んで芝居がからぬよう	理論だけでは謡えぬ
ぬ	抜き書きは暗記に役立つ	抜けぬよう一字一字に力いれ
る	留守居は稽古によいチャンス	ルリも謡も磨けば光る
を	教える人の気持で習え	大ノリはゴマの一つが一拍子
わ	侘・寂・幽玄謡の生命	脇能のコトバ女でもヒラク
か	カエテの中は抑えて低く	カカルとはコトバのあとのサシのこと
よ	読み上げ謡は気が乗らず	呼掛は一字一字をユツタリと

た	他人の稽古に同吟は失礼	大臣は調子を張ってキビキビと
れ	例会には進んで参加	礼儀作法も修行の内
そ	莊重に謡う神祇もの	僧ワキは低めに洩くさびしげに
つ	剛吟・柔吟の区別正しく	ツヨ吟の上中同じ高さなり
ね	年期を積んで身につく芸風	ねばるなクリサシワカロンギ
な	名宣はしっかり自己紹介	中入地シテの気持ちに合うように
ら	楽に謡って心を込めよ	乱雑に走るな修羅ノリ大ノリ地
む	無理に出す声調子はずれる	無本の謡 真の謡
う	謡う以前に曲趣の理解	打切のあとの返し句ツレたけで
ぬ	息継ぎは文意と節を生かすよう	紅(イロ)入の女は若い位にて
の	吞節はンと発音	後シテは調子を張ってカカリめに
お	音階は正確に発声は明瞭に	オクリは急がずシツカリと
く	狂いの曲は運びと調子よく	クセ謡分けて序破急三段に
や	役不足でもあなどらず	ヤトリの五文字カルク出る
ま	巻舌・鼻声謡に禁物	待謡シテ待つ心でシットリと
け	稽古は順序に従って	稽古休めば謡もとまる

京	す	せ	も	ひ	え	し	み	め	ゆ	き	さ	あ	て	え	こ	ふ
今日の師匠は今日復讐 <small>あやまち</small>	素直な謡はすぐ伸びる	扇子の扱いは正式に	ものにならぬは稽古が足りぬ	拍子合拍子不合を謡い分け	得手な曲でも必ず予習	姿勢正しく胸張り肩落し	見栄をはずらに基礎稽古	目を動かすと心が乱れる	優雅に謡う三番目 (鬘物)	聴きて上手は謡上手	サシクリーセイ拍子不合	上歌下歌クセロンギ拍子合	天狗謡は上達止まる	遠慮が過ぎては芸のびず	声より節と調子と間	不断の稽古が花咲かす
	素直な謡身の宝	正確に習い覚えよ節まわし	問答になったら僧も調子張り	平ノリの五文字の下ノ句ハコビよく	衿と面は位の決め手	白二つ重ねた女位とる	道行はノリ良く旅の心にて	目立たぬように息をつく	幽玄にシットリとゆく三番目	狂女の出気をカケ高くスラスラと	サシの上音コトバの高さ	アタリサゲウキを抑えて下ノ中へ (ヨワ吟)	丁寧な謡うが上達第一歩	遠慮せず前に座るがエチケツト (地謡)	コトバのイロは節のように	節のイロはコトバのように

謡曲歌かるた百首
 曲目一覽

一	葵上	一五	鸚鵡小町	二九	呉服	四三	蟬丸	五七	道明寺	七一	班女	八六	和布刈
二	阿漕	一六	小塩	三〇	玄象	四四	草紙洗小町	五八	融	七二	檜垣	八七	紅葉狩
三	葦刈	一七	嬪捨	三一	小督	四五	卒塔婆小町	五九	木賊	七三	雲雀山	八八	盛久
四	安宅	一八	大原御幸	三二	西行桜	四六	高砂	六〇	朝長	七四	氷室	八九	屋島
五	敦盛	一九	女郎花	三三	桜川	四七	忠度	六一	難波	七五	富士太鼓	九〇	山姥
六	蟻通	二〇	杜若	三四	実盛	四八	龍田	六二	錦木	七六	藤戸	九一	夕顔
七	井筒	二一	景清	三五	志賀	四九	玉葛	六三	鶴	七七	二人静	九二	遊行柳
八	浮舟	二二	葛城	三六	俊寛	五〇	田村	六四	野宮	七八	舟橋	九三	弓八幡
九	雨月	二三	鐵輪	三七	俊成忠度	五一	土蜘蛛	六五	野守	七九	船弁慶	九四	熊野
一〇	采女	二四	賀茂	三八	昭君	五二	經正	六六	白樂天	八〇	放下僧	九五	楊貴妃
一一	雲林	二五	通小町	三九	隅田川	五三	定家	六七	羽衣	八一	卷絹	九六	養老
一二	江口	二六	邯鄲	四〇	住吉詣	五四	東岸居士	六八	半部	八二	松風	九七	吉野静
一三	老松	二七	清経	四一	西王母	五五	道成寺	六九	鉢木	八三	松虫	九八	頼政
一四	大江山	二八	鞍馬天狗	四二	関寺小町	五六	東北	七〇	花筐	八四	三井寺	九九	弱法師
										八五	三輪	百	羅生門

金剛右京編

謡曲

歌かるた百首

1 葵上

寄り人は今ぞ寄り来る長浜の
蘆毛の駒に手綱ゆり懸け
先代舊事詠歌本記御託の歌

2 阿漕

伊勢の海阿漕が浦に引く網も
度重なれば顕れにけり
古今和歌六帖 詠人不知

3 蘆刈

難波津に笑^きや此の花冬籠もり
今は春べと咲くや此の花
古今集序 王仁

4 安宅

これやこの行くも帰るも別れては
知るも知らぬも逢坂の関
後撰集 蟬丸

5 敦盛

淡路瀉通ふ千鳥の声聞けば
寝覚も須磨の関守は誰そ
金葉集 源 兼昌

6 蟻通

雨雲の立ち重なれる夜半なれば
ありとほしとも思ふべきかは
貫之集 紀 貫之

7 井筒

筒井筒井筒に懸けしまろがたけ
老いにけらしな妹見ざる間に
伊勢物語

8 浮舟

橘の小島の色は変らじを
この浮舟ぞ寄辺知られぬ
源氏物語浮舟の巻

9 雨月

月は洩れ雨はたまれととにかくに
賤が軒端を葺きぞわづらう

選集抄卷五 江口桂本ノ尼の連歌

12 江口

世の中を厭ふまでこそ難からめ
假の宿りを惜しむ君かな

新古今集 西行

15 鸚鵡小町

雲の上はありし昔に変わらねど
見し玉簾の内やゆかしき

十訓抄第一 ある女房

10 采女

我妹子わきもこが寝ぐたれ髪を猿沢の
池の玉藻と見るぞ悲しき

大和物語・拾遺集 柿本人麻呂

13 老松

君が代は千代に八千代にさゞれ石の
巖となりて苔のむすまで

和漢朗詠集 詠人不知

16 小塩

大原や小塩の山も今日こそは
神代のことも思ひ出づらめ

古今集・伊勢物語 在原業平

11 雲林院

春風は花のあたりを避よぎて吹け
心づからやうつろふと見む

古今集 藤原好風

14 大江山

土も木も我が大君の国なれば
何処やどか鬼の栖やどなるらむ

太平記 紀 朝雄

17 姨捨

我が心慰めかねつさらしなや
姨捨山あはすてに照る月を見て

古今集 詠人不知

18 大原御幸

池水に汀の桜散り敷きて

波の花こそさかりなりけれ

千載集 後白河院

19 女郎花

名に愛でて折れるばかりぞ女郎花

我落ちにきと人に語るな

古今集 僧止遍昭

20 杜若

唐ころも着つつ馴れにし妻しあれば

遙々来ぬる旅をしぞ思ふ

古今集・伊勢物語 在原業平

21 景清

秋来ぬと目にはさやかに見えねども

風の音にぞ驚かれぬる

古今集 藤原 敏行

22 葛城

楚樹ゆふ葛城山に降る雪は

間なく時なく思ほゆるかな

古今集 大歌所御歌

23

鐵輪

蜘蛛の絲に荒れたる駒は繋ぐとも

二道かくる人は頼まじ

出典なし 能本作者の創作か

24 賀茂

石川や蟬の小川の清ければ

月も流れを尋ねてぞ澄む

新古今集 鴨 長明

25 通小町

風の吹くにつけてもあなめあなめ

小野とは言はじ薄生ひたり

江家次第・古事談・袖中抄等
上句伝小町 下句伝業平

26 邯鄲

我が宿の菊の白露今日ごと

幾世積りて淵となるらむ

拾遺集 清原元輔

27 清経

假寝うたたねに戀こしき人を見てしより
夢ゆめてふものはたのみ初めてき

古今集 小野小町

28 鞍馬天狗

今日見みずは悔くやしからまし花盛り
咲さきも残のこらず散ちりもはじめず
謡曲拾葉抄は源頼政の歌とする

29 呉服くれは

君が代は天の羽衣うば稀まれに来て
撫なつとも盡つきぬ巖いわならなむ

拾遺集 詠人不知

30 玄象けんじょう

戀こひ侘わびて泣なく音ねに紛まがふ浦波うらなみは
思おもふ方かたより風かぜや吹ふくらん

源氏物語 須磨の巻

31 小督こくわう

秋の夜の月毛つきげの駒こまよわが恋こふる
雲井くもいを翔かれ時ときの間も見みむ
源氏物語 明石の巻

32 西行さいぎやう

埋うれ木きの人知しれぬ身みの行方ゆきかたにも
心こころの花は残のこりけるぞや

謡曲拾葉抄は西行の歌とする

33 櫻川おうしづ

年としを経て花はなの鏡かがみとなる水みづは
散ちりかゝるををや曇くもるといふらむ

古今集 伊勢

34 實盛じつせい

もみぢ葉はを分わけつゝ行ゆけば錦にしき着きて
家いへに帰かへると人ひとや見みるらむ

後撰集 詠人不知

35 志賀しげ

雪ゆきならば幾いくたび袖そでを拂ははまし
花はなの吹雪ふきゆきの志賀しげの山越やまこ

出典不明 作者不明

36 俊寛

濡れて干す山路の菊の露の間に
いつか千年ちとせをわれは経にけむ

古今集 素性法師

39 隅田川

名にし負はばいざ言問はむ都鳥
わが思ふ人はありやなしやと

古今集・伊勢物語 在原業平

42 關寺小町

侘びぬれば身うまひを藻の根を絶えて
誘ふ水あらば往いなんとぞ思ふ

古今集 小野小町

37 俊成忠度

さ々なみや志賀の都は荒れにしを
昔ながらの山桜かな

千載集 詠人不知

40 住吉詣

濡標みぞくし恋ふるしるしにここまでも
廻り逢めぐひける縁は深しな

源氏物語 濡標の巻

43 蟬丸

世の中はともかくにもありぬべし
宮も薰屋も果しなれば

新古今集 蟬丸

38 昭君

散りかゝる花の木陰に立ち寄れば
空に知られぬ雪ぞ降りくる

拾遺集 紀貫之(下の句のみ)

41 西王母

三千歳みちとせに生るてふ桃の今年より
花咲く春に遇ひにけるかな

拾遺集 凡河内躬恒

44 草子洗小町

蒔かなくに何を種うづきとて藻の
波のうねうね生ひ茂るらん

出典なし 能本作者の創作か

45 卒都婆小町

極楽の内ならばこそ悪しからめ
そとは何かは苦しかるべき

出典なし 能原作者の創作か

46 高砂

誰をかも知る人にせん高砂の
松も昔の友ならなくに

古今集 藤原興風

47 忠度

行き暮れて木の下蔭を宿とせば
花や今宵の主あまじならまし

平家物語 平 忠度

48 龍田

龍田川紅葉乱れて流るめり
渡らば錦中や絶えなん

古今集 詠人不知

49 玉葛

恋ひわたる身はそれならで玉葛たまあづら
いかなるすぢを尋ね来ぬらむ

源氏物語 玉葛の巻

50 田村

唯頼めしめじが原のさしも草
われ世の中にあらん限りは

新古今集 伝清水観音御歌

51 土蜘蛛

我が背子の来べき宵なりさ、蟹の
蛛くものふるまひかねて知るしも

古今集 衣通姫

52 經正

呉竹の笥かひの水はかはるとも
住みあかざりし宮みやの中かな

平家物語 平 經正

53 定家

玉の緒よ絶えなば絶えねながらえは
忍ぶることの弱りもぞする

新古今集 式子内親王

54 東岸居士

百千鳥さへづる春は物ごと
にあらたまれどもわれぞ古りゆく

古今集 詠人不知

55 道成寺

山寺の春の夕暮れ来て見れば
入相いりあひの鐘に花ぞ散りける

新古今集 能因法師

56 東北

春の夜の闇はあやなし梅の花
色こそ見えね香やは隠るゝ

古今集 凡河内躬恒

57 道明寺

君が住む宿の梢を行く行くも
隠るゝまゝにかへり見ぞする

拾遺集 菅原道真

58 融

君まさで煙絶えにし塩竈の
うら淋しくも見え渡るかな

古今集 紀貫之

59 木賊

木賊とくさ刈る園原山の木の間より
磨みがかれ出づる秋の夜の月

夫木和歌抄 源仲正

60 朝長

雪の内に春は来にけり鶯の
凍こほれる涙今や解くらむ

古今集 二條后

61 難波

高き屋に昇りて見れば煙立つ
民の竈は賑ひにけり

新古今集 伝仁徳天皇御歌

62 錦木

錦木は立てながらこそ朽ちにけれ
狭布けふの細布胸あはずして

後拾遺集 能因法師

63 鶴ねえ

郭公名をも雲井にあぐるかな
ぼしと雲す

弓張月のいるにまかせて

平家物語

上句藤原頼長下句源三位頼政

64 野宮

神垣はしるしの杉もなきものを

いかにまがへて折れる榊ぞ

源氏物語 榊の巻

65 野守

天の原ふりさけ見れば春日なる

三笠の山に出でし月かも

古今集 阿部仲麿

66 白楽天

初春の朝あしたごとには来たれども

あはでぞかへる本の栖すまかに

古今秘抄・曾我物語

67 羽衣

天津風雲の通路吹き閉ぢよ
かよひち

乙女の姿暫し留とどめん

古今集 良岑宗貞

68 半菰はしご

折りてこそそれかとも見め黄昏に

ほのぼの見ゆる花の夕顔

源氏物語 夕顔の巻

69 鉢木

駒とめて袖うち拂う蔭もなし

佐野のわたりの雪の夕暮

新古今集 藤原定家

70 花筐はながたみ

頼めたゞ袖ふれ馴れし月影の

暫し雲井に隔てありとも

出典なし 能本作者の創作か

71 班女

戀すてふ我が名はまだき立ちにけり

人知れずこそ思ひ初めしか

拾遺集 壬生忠見

72 檜垣

水掬^なぶ釣瓶の繩を繰りかへし

昔に帰れ白川の波

出典なし 能本作者の創作か

73 雲雀山

五月待つ花橋の香をかげば

昔の人の袖の香ぞする

古今集 詠人不知

74 氷室^{ひぢろ}

袖ひぢて結びし水の凍れるを

春立つ今日の風や解くらむ

古今集 紀貫之

75 富士太鼓

信濃なる浅間の嶽も燃ゆるといへば

不二の煙のかひやなからむ

後撰集 駿河

76 藤戸

海士の刈る藻に栖^すむ虫の我からと

音をこそ泣かめ世をば恨みじ

古今集 藤原直子

77 二人静

見渡せば松の葉白し吉野山

幾夜積もりし雪にかあるらむ

拾遺集 平兼盛

78 舟橋

東路^{あづまじ}の佐野の舟橋取りはなし

親^{おや}し離^さくれれば妹^{いも}に逢はぬかも

万葉集 詠人不知

79 船弁慶

世の中の人は何とも岩清水

澄み濁るをば神ぞ知るらむ

石清水八幡の神詠

80 放下僧

ひかぬ弓放さぬ矢にて射る時は

当^あらずしかも外^{はず}さざりけり

夢窓国師の歌

81 卷絹

音無にかつ咲き初むる梅の花
おとなし

匂はざりせば誰か知るべき

沙石集

後嵯峨上皇

熊野参詣供奉の人夫詠

82 松風

立ち別れ稲葉の山の峰に生ふる
お

松とし聞かば今帰り来む

古今集

在原行平

83 松虫

秋の野に人松虫の声すなり

我かと行きていざとむらはむ

古今集

詠人不知

84 三井寺

水の面に照る月なみを数ふれば

今宵ぞ秋の最中なりける

拾遺集

源順

85 三輪

山田守るそほづの身こそ悲しけれ
も

秋果てぬれば訪ふ人もなし

続古今集

玄賓僧都

86 和布狩り
めかり

春秋の雲井の雁も留め得ぬ
とび

誰が玉章の文字の関守
たまづる

新勅撰集

藤原公經

87 紅葉狩

山川に風の懸けたる柵は
しがらみ

流れもあへぬ紅葉なりけり

古今集

春道列樹

88 盛久

見渡せば柳桜をこき交せて

都ぞ春の錦なりける

古今集

素性法師

89 屋島

照りもせず曇りも果てぬ春の夜の

朧月夜にしくものぞなき

新古今集

大江千里

90 山姥

遠近おちちのたづきも知らぬ山中に

おぼつかなくも呼子鳥かな

古今集 詠人不知

91 夕顔

山の端の心も知らで行く月は

うはの空にて影や絶えなん

源氏物語夕顔の巻

92 遊行柳

道の辺に清水流るゝ柳蔭

暫しとてこそ立ちとまりつれ

新古今集 西行

93 弓八幡ゆみやわた

二月ふたつきの初卯かぐらの神楽おもしろや

諷うたへや諷へ日影さすまで

藻鹽草は八幡大菩薩神詠とする

94 熊野

いかにせむ都の春も惜しけれど

馴れし東あづまの花や散るらん

平家物語 熊野が女侍むすめ従

95 楊貴妃

尋ね行く幻もがな傳にても

魂の在處はそこと知るべく

源氏物語桐壺の巻

96 養老

松蔭に千代を映せる緑かな

さも潔き山の井の水

出典なし 能本作者の創作か

97 吉野静

賤やしづ賤の環苧あや繰りかへし

むかしを今になす由もがな

伊勢物語 詠人不知

98 頼政

我が庵は都の巽しかぞ住む

世を宇治山と人はいふなり

古今集 喜撰法師

99
弱法師よわほし

住吉の松の木間より眺むれば
月落ちかゝる淡路島山

源三位頼政集 源 頼政

100
羅生門

つくづくと春の眺めの淋しきは
忍しのぶに傳ふ軒の玉水

新古今集 大僧正行慶

当流
絵入

謡玉手箱うたいたまてばこ

謡外題揃之卷うたいげだいぞろえ



大谷 節子

『源氏物語』の巻数は五十四。謡の曲名は内百番、外百番。今年、千年紀に沸く『源氏物語』であるが、五十四帖を全巻読破した人は、古来稀である。しかし、多くの人々が『源氏物語』に憧れ、これに親しんできた。『源氏物語』の梗概書を読み、あるいはせめて『源氏物語』の中のことば「源氏詞」を覚えて、その世界に寄り添おうと願ってきた。その行き着く先が、巻の名前だけでも覚えようとする享受の在り方である。

桐壺に、帚木、空蟬、夕顔の、紫を(若紫)、摘む(末摘花)、紅葉ばの(紅葉賀)、宴(花宴)、葵、榊(賢木)、花散る(花散里)、須磨に、明石、み(濔標)、蓬生、閑屋、絵合の、松(松風)、薄雲に、朝顔、少女、玉葛、初音、胡蝶に、螢、常夏とこなつ、篝かがり(篝火)、野分みゆき、行幸みゆきの、袴(藤袴)、檜ひのきや(檜柱)、梅(梅枝)、藤(藤裏葉)、若(若菜)、柏(柏木)、笛に(横笛)、鈴虫、夕霧に、法ののり(御法)、幻、雲(雲隠)、匂ふ(匂宮)、紅梅、竹河、橋(橋姫)、椎が本、総角あけまきに、早蕨さわらび、宿る(宿木)、東屋は、うき(浮舟)、蜻蛉も、手習ふた夢(夢浮橋)。

〔翁草〕卷五十九 源氏物語目録

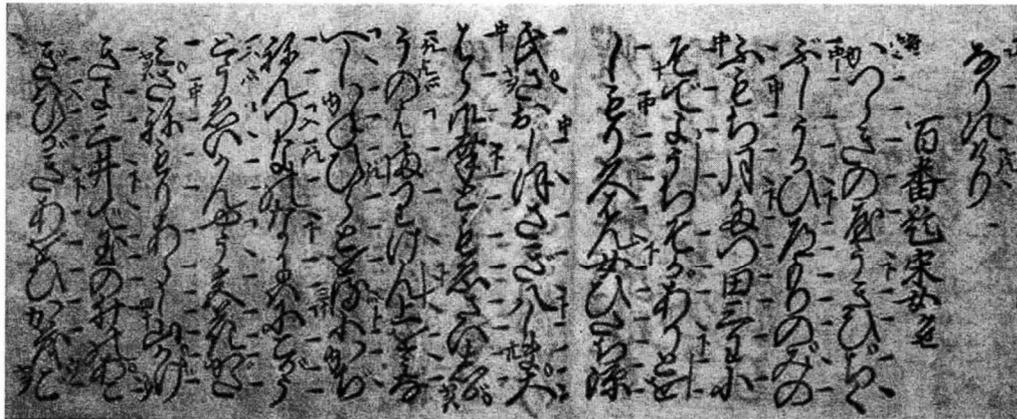
右は、五十四の巻名を暗記するための覚え歌。享保八年三浦庚安刊行『便用謡』^{びんよううたい}には、七十二候や王代記等と共に、「源氏之題」を覚える謡が収録されている。

貝の内側に源氏各巻の画題を描いた源氏貝合せ、源氏の巻名で呼ぶ図形で組香をする源氏香、源氏の巻名と、六十余州の国名を交互に賦物^{ふしもの}として詠み込む源氏国名百韻連歌、源氏の巻名で利き酒をする源氏酒、遊女たちに付けられた源氏名など、『源氏物語』五十四帖の巻名は多くの遊びを生み出してきたが、これと同じ現象は、謡にも起きている。

百番題 采女クセ

かづらきの(葛城)やうききひ(楊貴妃)。ちくぶし(竹生鳥)うかひ(鵜飼)道もりの(通盛)。みのぶ(身延)もち月(望月)たつ田(龍田)みわ(三輪)小そでようちそが(小袖曾我・夜討曾我)ありどをし(蟻通)もり久(盛久)はん女(班女)ひたち(常陸帯)源氏(源氏供養)。さおしほ(佐保山・小塩)さぎ(鷺)八

しま(屋島)。大はら御幸(大原御幸)ともゑ(巴)さい(犀)しが(志賀)。うのは(鵜羽)まり(鞠)けん上(絃上)をみなへし(女郎花)かねひら(兼平)とをる(融)小かぢねん(小鍛冶・自然居士)つなの(綱)なにはに(難波)こがう(小督)とうゑい(藤栄)かんやう宮(咸陽宮)花がたみ(花筐)。さねもり(実盛)あらし山(嵐山)。かけきよ(景清)三井で(三井寺)玉の井の(玉井)。あこぎは(阿漕)ひがき(檜垣)あをひ(葵上)かも(賀茂)ごおうの(護王)かしはさぎ(柏崎)。ばせを(芭蕉)おいまつ(老松)ふたりしづかに(二人静)。かんとん(邯鄲)おばすて(姨捨)ゆや(熊野)。しらひげ(白鬚)うきふね(浮舟)たゞのりの(忠度)あづ、に(井筒)うとふ(善知鳥)はじとみの(半部)。とくさに(木賊)おふむ(鸚鵡小町)くずの(国栖)そさ(素盞桜カ)。かきつちぐるま(杜若・土車)さかがみの(逆髪)。遊行の(遊行柳)四き(世継曾我)野もり(野守)しやりも(舍利)ぬえ(鶴)まきぎぬの(巻絹)いけにへて(池贄)。野、みや(野宮)ひむろ(氷室)は



正徳五年刊『瓢箪盃』百番題

ごろもの(羽衣)。さくらが(桜川)かなわ(鉄輪)あしめかり(芦刈・和布刈)。かうう(項羽)くれは(呉服)とりをいの(鳥追舟)あま(海士)おろち(大蛇)ふじ(藤)とうぼく(東北)。草紙を(草子洗小町)そとわ(卒都婆小町)たかさご(高砂)むめがえぐち(梅枝・江口)。夕がを(夕顔)しゆんくほん(俊寛)たむら(田村)うねめの(采女)きぬた(砧)たえ

まなり(当麻)。

(正徳五年刊『瓢箪盃』)

右は、「采女」のクセの節に見事に謡百番の曲名を嵌め込んだ謡。洒落謡(謡の替え歌)であるが、謡の曲名を覚えるための使用謡でもある。人々はこうして、謡題を覚え、謡題で遊んだ。

二

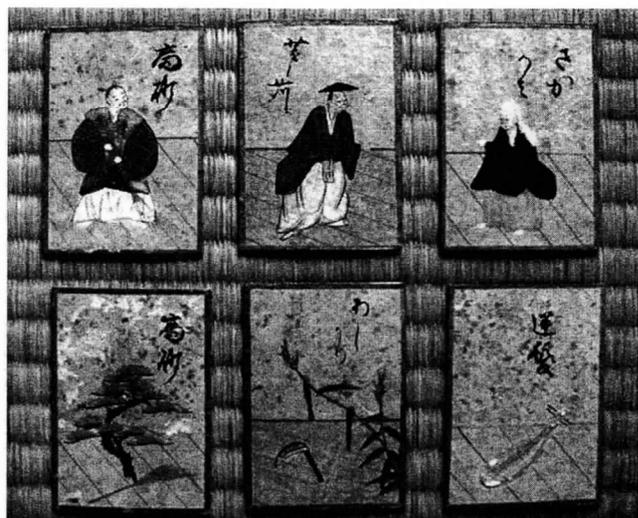
謡の題だけを記した刷物もある。大坂高麗橋の野村長兵衛刊『謡府録』は、表面に内百番と外百番、欄外に三十番物、当流乱曲五十番、裏面に三百番、四百番、五百番の曲名を掲出し、欄外に式三番の詞章を付した一枚物。天保十一年山本長兵衛刊『謳外題揃』横本一冊は、内百十番、外六十二番、別能二十八番、計二百番の曲名を掲出する。

『謡府録』表面の内百番外百番の組み合わせは、貞享三年九月山本長兵衛刊行以後、江戸期を通じて最も流布した内組F後組(表章氏『鴻山文庫本の研究 謡本之部』わんや書店 昭和四十年刊による分類)のものである。『謳外題揃』は、正徳六年弥生に山本長兵衛が

稗)を学ぶことを端緒に教養を身に付ける往来物的要素も備えている。

三

謡題を用いた遊びは多くあるが、一例として謡かるたを挙げる。左図は、能の登場人物と作り物の図柄が一組となったもので、裏に百人一首の上句と下

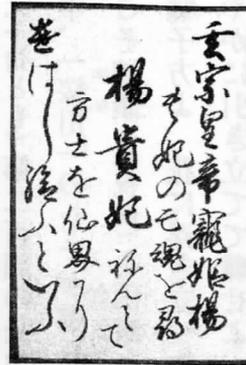


『謡かるた』「高砂」「芦刈」「逆髪」

句が各々書かれてい
曲名を讀
で、曲の小
道具が描か
れた札を取
るものであ
るが、札を
取った者が
その曲の謡
を謡うとい
う遊び方も

可能であろう。同種のものに永青文庫蔵謡かるたがあり、こちらは点数が書かれた札を含む四枚を一組とする。

神戸女子大学古典芸能研究センター蔵『謡歌留多』百曲二百枚は、曲名と梗概を書いた札の裏面に、その曲の一部が無章句で書かれており、これに対応する札の表面には曲名だけが書かれ、その裏面にはもう一枚と同じ箇所謡の文句が書かれている。このかるたも、謡の習得度によって、幾通りかの遊び方が可能である。次頁に掲出した楊貴妃を例に取れば、「楊貴妃」と読んで「楊貴妃」の札を取る場合、楊貴妃の梗概を讀んで「楊貴妃」の札を取る場合、同じく楊貴妃の梗概を讀んで「われまだしらぬしの、めの」の札を取る場合、讀み手が「われまだしらぬしの、めの」と謡って「われまだしらぬしの、めの」の札を取る場合、同じく「われまだしらぬしの、めの」と謡って「楊貴妃」の札を取る場合、讀み手が「楊貴妃」と讀んで、「われまだしらぬしの、めの」の札を取る場合などである。札に書かれた謡は無章句で



『謡歌留多』楊貴妃 神戸女子大学古典芸能研究センター蔵

あるが、謡の素養があれば、節を付けて謡うことができる。明治三十四年松本善助刊の『諷合せかるた百十番』の読み札は、章句付きである。百四十九曲がそれぞれ楷書と草書で札に墨書された京都文化博物館蔵かるたや、同じく曲名だけが記される宝鏡寺蔵の謡かるた(いずれも近代のもの)も、初心者遊びとしては、同じ曲名札を取ったり、トランプの神経衰弱のように裏返して、

同じ札を集めたもの。上級者になると、読み手は曲名の札を見て、諳んじた謡の一節を謡い、この謡を聞いて曲名の札を取る遊びが可能である。同じく取った札の一節を謡うルールにすれば、難易度を上げることができる。

このように謡かるたは、幼児が「犬も歩けば棒に当たる」の札を取って諺を覚える如く謡の題でことばや漢字や故事を覚えていく初心者から、自由自在に謡の引出しを開くことができる上級者まで、習熟度に応じた楽しみ方ができるものである。

酒宴が盛り上がった頃を見計らって出される吸い碗の蓋裏に謡の名が蒔絵で施され、蓋を開けた客人たちは各々、当たった曲を謡って楽しんだ、というのは先年亡くなった遠縁の者の話であるが(拙稿「謡の小道具」。月刊「能」平成十五年四月号掲載)、人々は内百番外百番、番外数百番の謡題から生み出される遊びを、文字通り謳歌していた。

当流
絵入謡玉手箱うたいたまてばこ

謡俳諧之卷



大谷 節子

謡俳諧に

はなのふる役者よはやせ桜川

右は、斎藤徳元とくげんの『於伊豆走湯誹諧』いづはしゆめはいかい（熱海千句・徳元千句とも）第二百韻の発句。桜の花びらが舞い散る中、「桜川」のシテが遊狂の舞を舞っている。これこそ纏頭はな（御祝儀）を雨霰あめあられと受ける華やかな役者の姿。囃子方よ、花に浮き立つ物狂の春の心を、さらに華やかに引き立てて囃せよ、の意。

詞書きに言う謡俳諧とは、物名もののなを詠み込む物名俳諧の一種で、各句に謡の名を嵌め込んで連ねる連句であり、貞門俳諧の時代に多く詠まれた。貞徳に批点を受けた石田未得みとく作百韻（天理図書館綿屋文庫蔵）、徳元・高島玄札げんさつに批点を受けた同じく未得の百韻（早稲田大学図書館蔵）、雛屋立圃編『底拔磨』そこぬけうす（正保三年刊）付載の児玉規吉ききつ作百韻、玄札・野水堂白鷗はくおう両吟『十種千句』（寛文八年刊）第三百韻の他、部分的には、徳元批点による未得の別作（『高野山俳諧書留帳』所収）、松江重頼編『犬子集』えのこ（寛永十年刊）卷十六に「或人独吟百句之内拔書」として収録される四十六句等が、

まとまったものとして知られている。

冒頭に引用した句は、『犬子集』卷二(春下)にも収録されるが、同書同巻には、編者重頼自身が「西行桜」を詠み込んだ句

謡俳諧に

東風こちかぜにちるは西行桜かな

も見える。東風は西へ向かう風。風に散る桜花の景で、「東風」に吹かれて西へ散り行くが故に、この桜は「西行桜」であると、道理を述べて興じた句である。なお、能「西行桜」のシテは、ワキが演じる西行の西山の庵室に咲く古木の桜の精であり、曲中ではこの木に名前は付けられていないが、重頼の時



徳元「謡俳諧」発句短冊 安藤武彦氏蔵

(図版提供 岐阜市歴史博物館)

代には西山、勝持寺の桜が「西行桜」ゆかりの桜として愛でられていた。菅原道真は、「東風吹かば句ひおこせよ梅の花あるじ主なしとて春を忘るな」(拾遺集)と詠み、都の梅香が東風に吹かれて西国の筑紫へと届くことを願ったが、西山に隠棲した西行が愛でた桜もまた、主を慕って西方浄土へ向かって散るのだと、背後に本歌を響かせてもいる。

右に二つの発句の例を挙げたが、謡俳諧の各句は必ずしも凝った仕立てを持っていないわけではない。冒頭引用の徳元『於伊豆走湯俳諧』発句以下をしばらく引用するが、

謡之名俳諧 第二

花のふる役者よはやせ桜川

高砂は先春の祝言

霞酌くむ采女のかはらけ取分て

そのかづらきの大君のまへ

国々やなにはのことも納らん

鳴めぐりしてたつるせい札

金山をほりてたからを望月に

もみぢ狩してあそぶ明暮

下にだにをかぬ扇の舞車

百万人もあふぐ行幸

嵯峨よりも松の尾迄も時めきて

祈念のためかまいるの、みや

絵馬をや手毎こごとに持て参るらん

竹の雪かともゆるしらゆふ

びかくと雲のたへまに月寒さえて

今又来るかかのぜがいばう

すみかくと鞍馬天狗いせも出なまし

みなきりつくす杉の大木

今朝みれば松風ばかりや残るらん

磯やに波のよるはとうく

(東京大学酒竹文庫蔵「徳元千句」)

笹野堅編「斎藤徳元集」所収)

このように謡俳諧は、謡曲名を駆使して詠み継ぐことを主眼とした遊びであった。

同じ俳諧の点望みける発句に、東北をしてければ、

てんだうにかなふ詠吟すくなくて東ト養を恨み

給ふな

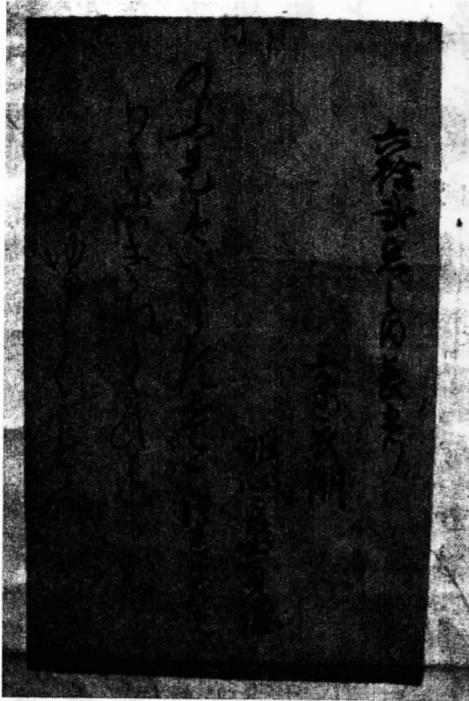
(『古今夷曲集』巻九)

右、半井ト養なからいぼくようの狂歌は、「謡外題を百韻の誹諧連

歌にし、点を望みける草の奥に書付ける」という詞書きを持つ貞徳の狂歌(規吉作百韻に付した一首「なふ

これは」)に続いて掲出されるもので、発句に「東北」を詠み込んだ或る「謡俳諧」(現存せず)に、ト養が点を付けた時のものと知られる。

ト養は、「東北」のクリ「それと和歌といつば、法身説法の妙文たり」に続くサシ謡



規吉作「謡俳諧」貞徳奥書部分

かるが故に天地を動かし鬼神を感じせしむる言葉、神明仏陀の冥感に至る、殊に時ある花の都、雲居の春の空までもどけき心を種として、天道に叶ふ詠吟たり

の最終句を用い、さらに自らの名を掛詞にして「東北」の謡曲名を詠み込んでみせた。昔の歌仙ならばいざ知らず、天道に叶うような名句はめつたにないのですから、天ならぬ点を付した句が少ないからといって、お恨み下さいますな、の謂い。挨拶の句ではあるが、こうして点者も共に楽しむ謡俳諧の姿が彷彿とする。

二

貞門俳諧の次の時代を担った談林俳諧では、発句付句に謡の一節を大胆に嵌め込んだ、謡曲調俳諧が流行する。

大坂宗因、宇治にて、

里人の渡りさふらふか橋の霜

とせしを、謡をたぐちに取たるとて人々興じけ

れば、扱はよき事じやと心得て、
生国は越前鱈で候ひき

小鮎なます首かき切て捨てんげり

などいひて、謡の本を至極の歌書とする人あり
みえたり。大にあさましき次第也。偏に醜婦眉
をしはむる類也。(寛文四年刊 犬井貞恕「蠅打」)

右、「景清」の一節を取り込んだ宗因の発句「里人の渡りさふらふか橋の霜」が、既に万治三年刊「懐子」に収録されていることから、「謡をたぐちに取たる」宗因の斬新な句作りが評判を呼んで謡曲調俳諧が爆発的な人気を博したのは、万治の頃に溯ると言われている(今榮藏「初期俳諧から芭蕉時代へ」他)。

ところで、書肆による謡本刊行は、慶長末年から漸進的な増産体制に入っていた。寛永中本と呼ばれる粗末な料紙の中本、正保四年刊の半紙本(正保耶查本)の復刻を繰り返して、明暦三年には野田弥兵衛が観世流最初の外百番謡本を刊行。万治二年(二六五九)は山本長兵衛が初めて頭注入りの謡本を刊行した年である。

謡本の発行部数は未詳であるが、ケンブリッジ大学アストン文庫所蔵の元和・寛永ごろの古活字版『狭衣』の表紙裏貼りに使われた書付反故かきつけほごには当時の謡本の製本発注部数が記されており（林望「江戸時代初期製本書留」(仮題)について——ケンブリッジ大学図書館蔵古活字版『狭衣』の表紙裏貼」「東横国文学」二十一号 一九八九年）、そこから窺い得る発行部数の桁違いの多さから、謡本の購読者は後人の想像を絶する広汎なものであったことが推測されている（渡辺守邦「開放の機運」『岩波講座日本文学史』第七巻 一九九六年）。

「謡をたゞちに取たる」謡曲調俳諧の興隆は、こうした謡本の刊行と度重なる重版の素地の上に成ったものと考えるべきであろう。

碁ばんは箱いれに入おきて置けり

十ととぢあれど半なかばはしらぬ謡本

玄札

（『犬子集』巻十四）

右、玄札の句には、たとえ半分は開かず仕舞であつたとしても、俳諧を詠む者の手元に、五番綴の謡本が揃えられていた情景が詠まれている。そして、そ

れは読まれるためではなく、やはり謡うためであつたことは、次の句からも伺えよう。

等類しやうるいはのがれがたしや磯のなみ

其外そのほか悪魚鰐わにのかるくち

観世が音曲おんきょく聞心きこころちし候

（『西山宗因点取十百韻』）

きつ、やん舞の装束翁おきなどの

小寺不及

（樋口兼頼編『熱田宮雀』翁舞）

宗因の点取十百韻は「海士」玉の段の一節の謡取り。変化に富む音曲の部分であり、少しでも謡の素養があれば、謡の声が耳に聞こえてこよう。「観世が音曲聞く心地し候ふ」という注を付した宗因の耳にも、謡の師匠の声が聞こえていたのである。「杜若」の一節「着つつや」に吞節のみぶしの「ん」を付した不及の句からも、俳諧の詠み手の口からは謡がこぼれ出ているのを指摘することができる。

貞徳公、諷うたは誹はいの為に源氏物語なりと。

（燕石『良薬抄秘府』）

謡舞世話や平家や太平記みな俳諧のよき友ぞか

し
文章や歌や諷を取てこそ次第まさりに句は新し
く
諷舞古歌をひかでは道のおくひろき国にもけふ
のせば布
句のとまり異風なりとも謡よりとれる詞はそれ
を一作

(寛文四年刊重頼撰『佐夜中山集』卷五所載しきもくうた式目歌)

このように謡は、拡張された本歌取りの素材の宝庫、供給源であったが故に「俳諧の源氏」と言われたが、貞門の継承者であった貞恕が「謡の本を至極の歌書とする人」(前掲『蠅打』)と言う時、それは謡曲まがいの句を放言する談林俳諧の安易さ、低俗さを批判するものであった。

謡曲調俳諧は、「万治前後から急激に俳壇に増大し」た、「和歌連歌的素養とは無関係な世界から俳壇にくりこんで来る大衆作者」によって流行した、と言われる(今榮藏前掲書)。この「和歌連歌的素養とは無関係な世界から俳壇にくりこんで来る大衆作

者」こそは、万治三年に半歩先んじて、謡を享受し始めた層だったのである。この厚い享受者層なくして、謡曲調俳諧の興隆は有り得なかつた。万治前後の俳諧人口の急激な増大は、謡本刊行と連動する謡享受者層の増大に導かれての現象であつたといえよう。

此頃は謡の中の言葉に当世言葉をくはへて発句にせらるる。此仁(重頼)の長点をかけられし句に、

やれ春よおよそをみれば歌心

とし男あつぱれ器量の人躰哉

又ぬし(重頼)の句に、

書初はうれしきかなやいざさらば

右の句は皆謡の言葉そう也。

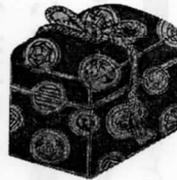
(寛文三年貞室編『五条之百句』、()内は稿者注)

謡の文句が耳に入っている者であれば、謡の言葉が口について出る。謡曲調ならば容易く俳諧が詠めるのである。謡曲調俳諧は、新興の俳諧人口獲得の極めて戦略的な方策としても機能したのではないだろうか。

当流
絵入

うたいたまてばこ
謡玉手箱

謡番付之巻



大谷 節子

湯谷松風に米の飯 (寛政九年「諺苑」)
毎時^{いつも}飽かぬ熊野 (寛政十一年「譬喩儘」)

右は、「熊野」「松風」がいつ見ても見飽きぬ人氣曲、定番の名曲であったことを伝える諺である。白米を毎日食する幸せに恵まれていた人々と、一生に一度しか口にできなかった人々とは、米の飯の価値は天地ほど異なるが、誰一人として好まぬ者はない。もちろん、敢えてこの二曲を選ぶについては異論

もあろう。しかし、わんや書店が大正十二年に次の方法で行った「喜多流謡曲人氣投票」によれば、

全国五千名の喜多流熱心家に六十番人氣投票を乞ひましたところ、各曲とも驚天動地の勢援裡に渾身の力を以て取進み、かく興味ある結果を見ることが出来ました。

投票締切 大正十二年四月十五日

投票員数 三千七百五十八通

大正十二年五月十日発表

(わんや書店大正十二年刊「喜多流謡曲人氣投票相撲番附」)

法政大学鴻山文庫蔵

最高得票三七二五票の横綱は「羽衣」。以下、「湯谷」

三五七二票、「蟬丸」三五七〇票、「八嶋」三四四七票、「松風」三四一六票と続く。「熊野」「松風」は東の大関と関脇。得票数二位と五位に輝く、堂々たる人気曲である。

わんや編輯局を勧進元とするこの『喜多流謡曲人氣投票相撲番附』、一人に各々六十曲を選ばせるという方法が統計学上どれほど意味のあるものかはさておき、この人氣投票自体が大正・昭和初期の謡ブームを反映した遊びであり、行司「翁」と年寄「姨捨」「関寺小町」「檜垣」の三老女を除く二百曲を、最高得票の「羽衣」から、得票数零の「舍利」「輪藏」「愛宕空也」まで人氣得票順に序列化した点が目を引く。

二

これ以前、謡番付の序列は、このような「客観的」データに基づく人氣曲の順に拠るものではなかった。曲の軽重、つまり「習い」「位」と呼ばれるものの有無、軽重によってなされるのが常であった。

明治三十八年八月四日発行の一枚刷『謡曲番組一

覧表』（編輯者、日吉田吉。発行者、煥乎堂 高橋常蔵）は、訂正者として宝生九郎が関与する謡番付である。三老女「姨捨」「関寺小町」「檜垣」、四天王「道成寺」「石橋」「望月」「鷲」、願人「翁」、世話人「乱」を含む百八十二曲の内、「翁」と「乱」を除く曲名の全てに国の名が付されており、国別謡名寄の性格も併せ持つ。大関は「木賊」と「定家」、関脇は「鸚鵡小町」と「卒都婆小町」、小結は「砧」と「求塚」。先の人氣曲「熊

明治三十八年刊 謡曲番組一覧表

野」「松風」は前頭止まりであり、上位を占める曲は
 いずれも宝生流で初伝、奥伝、別伝などと呼ばれて
 いる習いの曲である。

嘉永元年日吉蔵版の一枚刷謡番付は、勸進元「道
 成寺」、差添人「関寺小町」、行司「石橋」「望月」「鸚
 鵡小町」「姨捨」「檜垣」「卒都婆小町」「砧」等十四曲、
 頭取「木賊」「西行桜」「遊行柳」「恋重荷」「雨月」「綾
 鼓」、総世話「高砂」「鐘巻」、世話役「志賀」等二十
 六曲を含む総計二百三十六曲の番付。大関は「松風」
 「鉢木」、関脇は「安宅」「邯鄲」、小結は「定家」「小
 原御幸」。欄外には次のように、

是は能の位い、又は口伝秘曲にかゝらず只古
 作の面白きを撰みて甲乙をしるすとなむ
 位や口伝の有無、秘曲か否かに拠らず面白い曲を選
 んだと但し書きがあるが、役付きにはやはり習いの
 重い曲が顔を並べている。

右の一枚刷と同体裁の嘉永四年刊「狂言番付」も
 存するが（大阪市立中之島図書館蔵『保古帳』所収）、勸
 進元「狸腹鼓」、差添人「三番叟」、行司は「福ノ神」

嘉永元年日吉蔵版

御免	班花山融井葵	三井	景野	熊定	安宅	松風
女篋	筒上	鳥寺	清野	家宅	安宅	松風
石橋	望月	鸚鵡	姨捨	檜垣	卒都婆	砧
木賊	西行	遊行	恋重	雨月	綾鼓	高砂
鐘巻	志賀	定家	小原	御幸	鉢木	松風
関寺	小町	石橋	望月	鸚鵡	姨捨	檜垣
卒都婆	砧	木賊	西行	遊行	恋重	雨月
綾鼓	高砂	鐘巻	志賀	定家	小原	御幸
鉢木	松風	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家
小原	御幸	大関	松風	鉢木	関脇	安宅
邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇
安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木
鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原
小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結
御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家
鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原
関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸
安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木
邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇
小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅
定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲
小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結
御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家
鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原
関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸
安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木
邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇
小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅
定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲
小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結
御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家
鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原
関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸
安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木
邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇
小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅
定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲
小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結
御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家
鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原
関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸
安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木
邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇
小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅
定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲
小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結
御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家
鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原
関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸
安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木
邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇
小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅
定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲
小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結
御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家
鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原
関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸
安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木
邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇
小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅
定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲
小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結
御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家
鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原
関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸
安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木
邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇
小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅
定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲
小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結
御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家
鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原
関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸
安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木
邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇
小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅
定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲
小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結
御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家
鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原
関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸
安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木
邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇
小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅
定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲
小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結
御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家
鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原
関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸
安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木
邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇
小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅
定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲
小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結
御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家
鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原
関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸
安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木
邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇
小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅
定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲
小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結
御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家
鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原
関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸
安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木
邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇
小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅
定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲
小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結
御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家
鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原
関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸
安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木
邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇
小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅
定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲
小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結
御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家
鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原
関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸
安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木
邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇
小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅
定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲
小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結
御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家
鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原
関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸
安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木
邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇
小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅
定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲
小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結
御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家
鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原
関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸
安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木
邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇
小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅
定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲
小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結
御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家
鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原
関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸
安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木
邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇
小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅
定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲
小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結
御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家
鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原
関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸
安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木
邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇
小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅
定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲
小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結
御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家
鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原
関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸
安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木
邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇
小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅
定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲
小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結
御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家
鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原
関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸
安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木
邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇
小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅
定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲
小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結
御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家
鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原
関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸
安宅	邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木
邯鄲	小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇
小結	定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅
定家	小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲
小原	御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結
御幸	鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家
鉢木	関脇	安宅	邯鄲	小結	定家	小原
関脇						

以下七曲、大関は「花子」釣狐、関脇は「比丘貞」枕物狂」。謡番付に同じく欄外には、

是は狂言の位い、又は口伝にかゝらず只流好み面白きを以て甲乙をしるすなり。猶、是に洩候は追而再板致し候

とあるが、やはり上位を占めているのは習いの曲、大曲である。

当然のことながら、本来、曲目に軽重はない。習い、位による曲の序列化、階梯化は、これを担う人々の序列化、階梯化と一体の現象として生じたものである。

三

番付の上位に位置する曲目を習得するまでには、修業の階梯が存在する。その階梯を寺社参詣案内の形を借りて視覚化したものが、『和楽山観世音参詣独案内』（大正・昭和初年頃刊か）と題する一巻である。有名寺社への参詣ガイドブックは江戸時代から多く作られてきたが、これは服部観世音菩薩を本尊とす

る秦河勝建立の和楽山謡曲寺への参詣案内の図。山に登り寺へ参る道筋と、旧跡、難所等々を謡稽古の階梯になぞらえた謡道精進の図である。始発は「小謡の浜」。

此浦船に帆を上
て潯陽江に渡り
猩々が茶屋に着。
此辺蓬萊山鶴亀
あり。

「高砂」の謡で船出して、以下、謡題や謡道に関する地名、難所を越えながら進んでいく。たとえば、

此道筋広く土和



和楽山観世音参詣独案内
和楽山謡曲寺

らかにして歩みやすき故に、初心の人は多くはこの道へ行なり。

と説明される「番数越」や

此道猶平地にして所々に休み所も多き故、多用の人又は下根の人など分て此道へ行なり。されども心の俣に行故、道連と心そろはず。

と説かれる「独楽躰」を越え、分岐点である「邯鄲の里」へ着く。

此里より又別れ道あり、大事の所也。悟ひらくれば、右へ行、寢覚の床へ出、相生の辻より本山に至、早速の夢さめざれば左へ行。負おしみ坂を登る故、天狗が嶽に入て再び本道へ行事なし。

悟りを得て、「巧者道」

此道は初の二道よりはすこし難所なれども末は道もよく、面白き道なり。中年已後の人、此道より登山すべし。然れども、所々に行場ある故、不執心の信者、又は下根の人などは行がたかるべし。

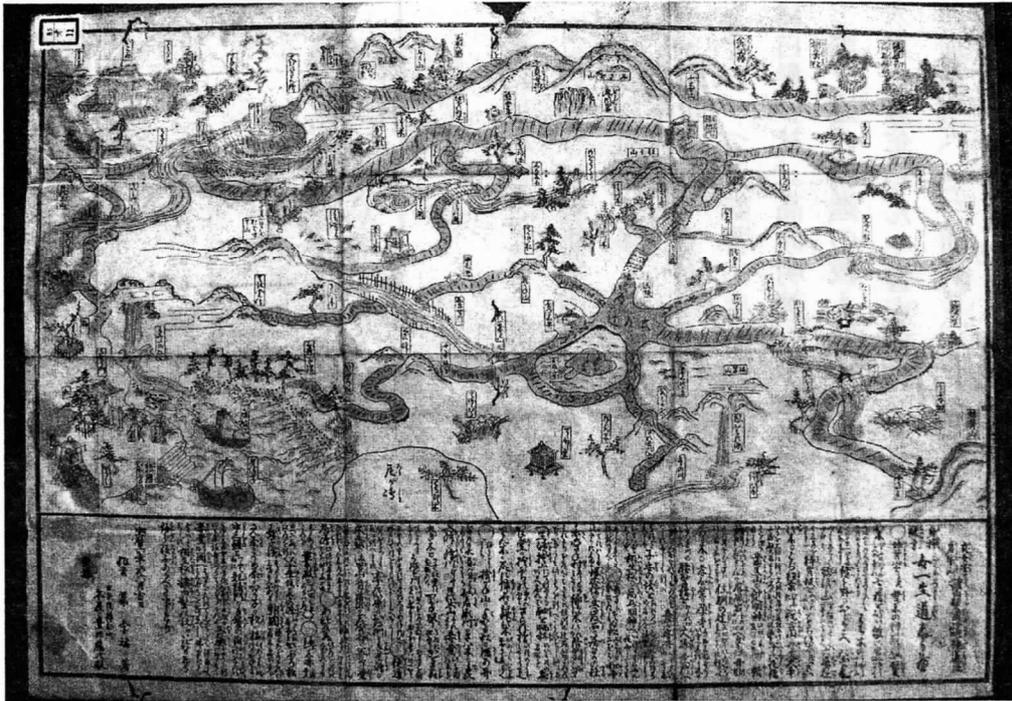
もしくは次の「達者街道」

当山の信者修行の本道也。然れども取分て難所なる故、尋常の信者は此道より登山せず、外道のより登山すれ共、志をとぐる人はなし。此道を登る人は初より苦辛難行を厭はず先達の教に任せ自力我慢の悪念を生ぜざれば、すみやかに諸願成就疑ひなし。道すがらに腰懸石とて能頃の休所あり。長休すれば根がはへてうごかれずを辿つて行くと、「思ひ遣杉」

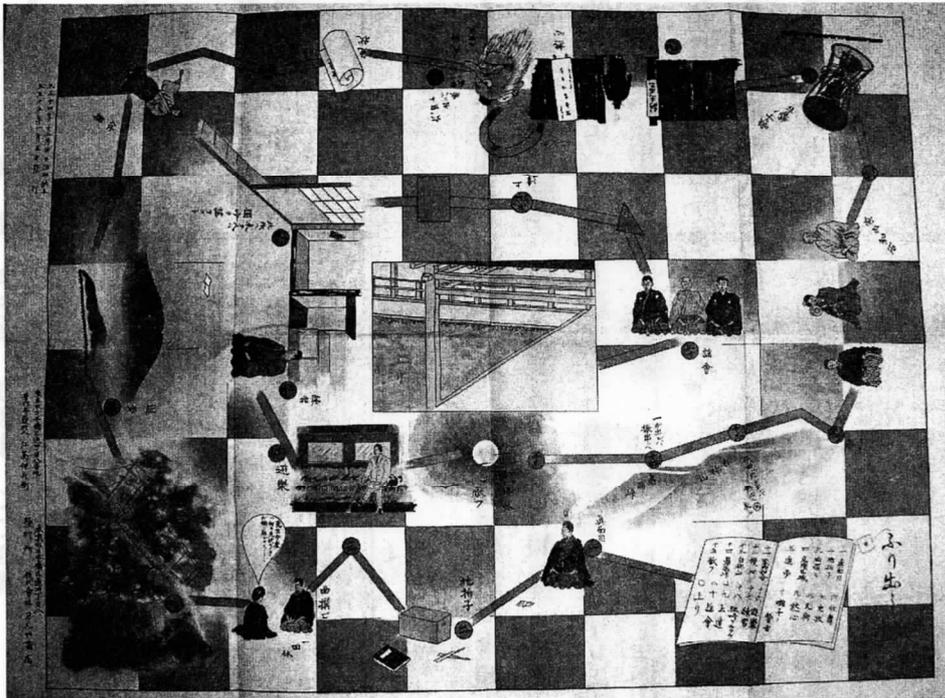
素人おどしといふ花咲、役好といふ菓なる。何れも大毒なり。又此木へたかく登れば忽ち翅生じて天狗が嶽へ飛行なり。

等の難所が待っている。そして、無事「工夫の窟」先達に随ひて入屋し、我慢自力にて奥深くいけば仙人の洞へすべり込道あり。是より末猶々大事の行場なり。先達のおしへをまもるべし。

を抜ければ、「是より本山の境内」という「真入門」を潜ることができ、「朽卒都婆」「当麻堂」「重荷石」「砧之森」「道成寺」のある本山への参詣が叶う。本堂の



宝暦六年刊 身持方女一生道しるべ (京都大学附属図書館蔵)



わんや書店大正十五年刊 謡双六 (檜書店蔵)

背後には奥宮として「翁社」が鎮座している。

このように参詣案内の形式で人の一生や求道を示すことは近世に多くみられるものである。宝暦六年刊『貞女峰もろしらが身竿山諸白髪高砂明神道法みちのり』もその一つ。妹背山を始発として、相生の松を経て諸白髪の社、高砂明神への道筋が示されている。

謡上達の精進の教えは、すころく双六の形でもたの娯しまれた。大正十五年わんや書店刊『謡双六』は、一真面目、二地拍子、三曲撰じ、四危険区域、五進歩、六仕舞、七免状、八天狗、九熱心、十囃子ノ稽古、

十一家内和合、十二慢心、十三自称山、十四鼻高峠、十五厭フ、十六遊楽、十七練習、十八独吟ヲウタウ、十九上達、二十謡会を経て上りとなる。

挫折、倦怠、慢心を克服しながら、より上位の謡を習得して謡の奥義に至り、人生を成就する。謡上達の階梯が人生の修養、人の道に重ねて説かれている。謡道は、修身の道具としても機能していったのである。

当流
絵入

うたいたまたまてばこ
謡玉手箱

謡講之卷



大谷 節子

一

扇のほねをならす物ごし
ふかぐくと屏風を立てうたひかう

(寛永五年十一月 徳元独吟千句第六向何

『未刊連歌俳諧資料』第三輯)

右、斎藤徳元独吟千句中の前句は、物腰と物越しが掛詞。京観世特有のものと伝えられてきた、屏風や障子、襖、御簾を隔てて謡を聴く謡講の様式が、寛永期(一六二四〜一六二九)以前に溯ることを示す貴

重な資料である。

現在、「うたひかう(謡講)」の文字を文献で確認できる初見は、『実隆公記』文明七年(一四七五)の紙背に書かれている物語絵巻絵詞草案である(徳田和夫『お伽草子研究』第三章「物語絵巻の創作―画中詞・語り物・狂言と歌謡―」)。この絵巻の全貌は不明であるが、酒宴の一場面において一人が、

さても、かかる会合に、なにの一ふしも候はねば、無念に存じ候。興あるあそびを張行し候。と発案する。この提案に対しては、「物語」ほどの慰みはないのだからという異見が出され、しばし「雑

談」が行われる。その後

□をんあみたぶ。やいく、はやうた□よかし

と「うた」を促された阿弥衆は、「弓八幡」の上歌

〔無〕るつきゆみのやはた山〔宮地〕のあともひしや

かたの

を謡う。同座の者は、

つけてうたはじや

と同吟を勧められるが、

□はにかくなり、こゑがしはがれて、たかくは

ゑうたはぬぞ。

原案では声が嘎（しわが）れたため、見せ消ち後の改稿では調子を知らないことを理由に、同座の者は謡うことを辞退する。そして、次のように盛り上がった、酒宴の一場面が終わる。

□いをかしく。わうおもしろし。物語よりも。

こんどのよりあひも、うたひかうにてあれかし。

（引用は続群書類従完成会刊『実隆公記』

卷十 文明七年秋紙背文書）

下って、『親俊日記』天文七年（一五三八）正月七日

条に、

河村彦左衛門、ウタイ講頭仕候間、遣レ之

『言継卿記』永祿十年（一五六七）五月二日条には、

烏丸父子被レ誘引レ之間、久我入道説會所へ令レ

同道レ罷向。是齋父子同前。毎月之諷講有レ之。

大和入道、淵田玄少以下十四、五人。音曲囃等

有之。五番。其外小諷共有レ之。

とあり、十六世紀半ばには既に月例の謡講が行われていたことが知られている。これらは謡好きの仲間が集まって謡を謡う、あるいは謡を肴に集う内輪の会であったものと思われる。

これが十七世紀に下り、進藤伊予（山科岩屋明神神主、脇方進藤流初代久右衛門忠次の父である可能性を宮本圭造『上方能楽史の研究』が指摘）が関わる謡講になると、

二位帰宅。次於清閑寺一謡講始依レ催、予列座。

神官十二、三人来。各出錢三十錢也。稽古白髭。

師道山科進藤伊予来。予及暮在所へ帰也。

（梵舜『舜旧記』慶長七年三月二十二日条）

豊国於兵部少輔宅、謡講興行。進藤伊予来。

稽古玉井也。

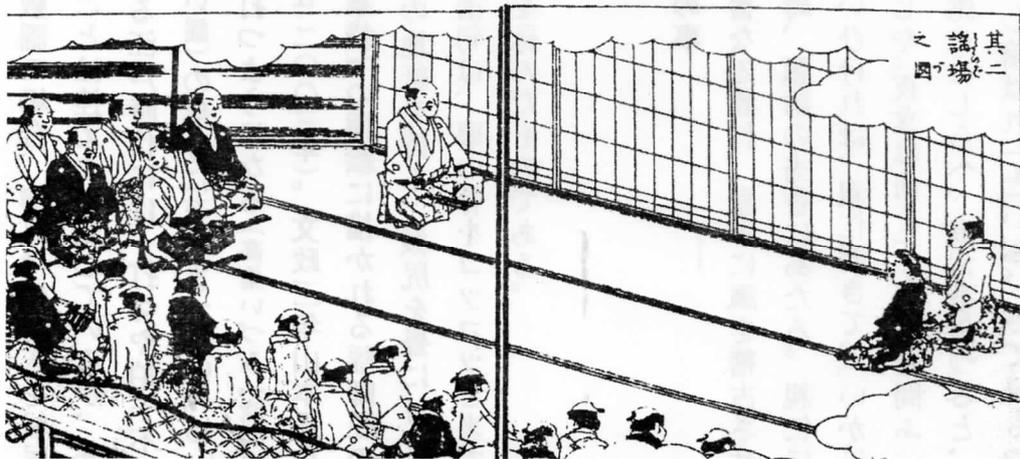
(同書慶長八年二月二十九日条)
講に集う者が些かの出資を行って運営する、「稽古」会の性格が強まっ
ていく。

冒頭引用の徳元独吟千句が詠まれた寛永五年には、既に観世流では元和卯月本、金春流では整版車屋本、そして寛永初年刊と推測されている(『鴻山文庫本の研究』)進藤流の木田七兵衛本が出揃うが、謡本は、そのままでは謡を謡うことができない。謡本大量出版時代の到来は、謡師匠の増大、稽古の場の増大と連動する。その結実の一つが謡講であった。

なお、徳元独吟千句の「扇の骨を鳴らす」とは、扇の要の先(緘尻)で拍を取る「扇拍子」を詠み込んだもの。扇で歌の拍子を取ることは、能



文政六年刊『観世小謡万歳楽』 謡講聴衆所之図



文政六年刊『観世小謡万歳楽』 謡場之図

以前、「早歌」でも行われていたことがその譜本から推測されており（横道萬里雄「早歌の新旧」『能劇の研究』岩波書店一九八六年）、金春禪鳳の書には、扇の持ちよう、緘尻で拍を打つ心得が説かれている。

一、人の座敷にては、扇をよこにもちて、拍子をそとくうつべし。能の場にては、たて、もちて、かなめにてそとつく也。たかくつくべからず。おほく、かたくとなればぶつそう也。心に拍子をもつをかんよふとすべし。つゞみ。太こあるうゑは、これにまかせてうつ也。

（『反古裏の書』ほごらのしよ）

謡の統率者であったワキがかつて能舞台で扇拍子を取っていたことは、次の福王甚右衛門盛忠の記録によっても知られ、

扇ヲ取、居ナガラ、諷に成テヨリ、扇ヲ筆ヲ持タル様ニカナメノ方ヲ下ニナシ、ツキテ、拍子ヲトル也。
（慶長四年福王脇仕舞付）

現在、能の地謡が緘尻を床に付けて扇を構えるのは、この名残である。

ところで、座敷謡の場合、禪鳳は畳や床を緘尻で叩いて音を出すことは控えよと記しているが、素人の謡が盛んになる江戸時代には、打切や拍子不_レ合の謡（拍に合わない謡）の部分に至るまで「のべつ」幕無しに扇拍子を打つようになる（高桑いづみ『能の囃子と演出』音楽之友社二〇〇三年）。文政三年山本長兵衛刊『式例小謡松葉袋』の挿絵に描かれる謡師匠の構えは、右手に扇の地紙を持ち、緘尻を畳に付ける。徳元独吟千句の前句は、扇の骨をコツコツと当てる。この扇拍子の音を詠んだものである。

二

諷人雇の事

ある万事文盲なる親仁、息子に諷を稽古させけるが、ある時、諷講の当番にあたる。親仁に諷講のことをいひければ、親仁聞きて、「いかにも、やすいことじゃ。夜食は何をするぞ」と問ふ。「夜食には小豆粥をこしらへ、諷六番果つると、そのままお出し給はれ」といふ。さて日もやう

く暮ると、今一しほ諷の衆中来り、まづ高砂より、次第く諷ひける。中入すぎて、待諷をうたはんとする時、しばしづつ休みけるほどに、親仁一番のうたひを、二番づつに数へければ、三番目果つると、そのまま息子呼びびて、「粥をいだせ。加減がよい」といふ。息子聞きて、「きやうがることや。まだやうく三番こそすぎたれ。いま三番うたはねば、粥は出されぬ。それでは粥がのびて加減がそこねふず。何として、かとしての」とて腹を立ててわめく。親仁もあきれたる体にてゐたりしが、いふやう、「それがいま三番うたふまで、粥がのびて待ちてゐらるるものか。いま五、六人も諷うたひを雇ふて、早く諷ひしまへ」といふた。

(延宝七年刊『当世軽口咄揃』)

謡など謡ったことのない無教養な父親が、せめて息子には人並みの嗜みを身に付けさせようと、謡を習わせている。ある時、息子が謡講の当番に当たると、能のイロハも知らない父親は、一曲の前場と後場の

間(中入の部分)に入れた短い休憩を、曲の替わり目と勘違いし、六番終了後に饗することになっていた小豆粥を三番終了時に準備してしまう。残り三番を謡い終える頃には粥は糊のようになって、とても出せる代物ではない。このままでは赤恥をかく、何とかしてくれと当たり散らす息子に、父親は思案の末、答える。「五、六人ほど諷うたひ(元禄三年刊『人倫訓蒙図彙』に深編笠を被った姿が掲出される謡の辻芸人)を雇つて早く終わらせればよいではないか」と。

右は、謡を全く解さない父親と、新興文化の末席に連なるうとしてゐる息子とのすれ違いを笑う小咄であるが、この時代の謡講が仲間内の温習会のようなものに変化していること、開始が日没であること、当番役は食事を饗する習慣があつたことなどを、こ



元禄三年刊
『人倫訓蒙図彙』
京都大学蔵
うたいうたひ

の資料から窺うことができる。

謡講が日没後に仄暗い灯りを灯して行われていたために、初心の者が謡本を読み間違った話もある。

素人の講に、鉢木のシテ問答の内に、「加様の鉢の木に罷成り」とうたふ。聞場にて不審して、

「謡損じは常の事ながら、加様の體に罷成」を鉢の木に罷成」とは存もよらぬ云損じなり。

いかなる訳にや」と様子をきけば、「燈を幽かにして本を控て謡ひける故、鉢の木の本来に、加様の體に」と字にて有けるを、ほの暗きに體の字、鉢と見違へたるなり」とて、大に笑に成ぬとかや。此類の麴相を思ひ出なば、尽期なからまし。

（『翁草』卷百四「謡曲の麴相」）
ところで、こうした江戸中期以降の謡講の有様を記したものとよく引用されるのが朋誠堂喜三二の文章であるが、

京の丸山の貸座敷などに謡講といふ事あり。尤素人にて諷を好む人、いひ合せて番組を作り、座敷を借りて諷ふ。蔭の間或は縁がはにもあ

れ、番組をはり、何シテ誰、ワキ誰など張出し置て、蔭にて謡ふに、諷を好ける人、けふは丸山に謡講ありといふ、行て聞んとて、好きの人といひ合はせ、弁当などこしらへて、一間蔭あるひは縁がはにて、其素諷を六番も七番も聞て帰ると也。

（享和三年刊『後は昔物語』）
このように入場料を取らず、経費は講の仲間によつて賄われ、聴聞客には茶菓子を振る舞い、謡が終われば酒宴となる謡講の運営のあり方は、京都では昭和初期まで踏襲されていた。

謡講の会費を「出樽」と言つた。酒樽を出すという意味の言葉で、実際にはお金を出すのだが、それで当日の経費をまかなつた。

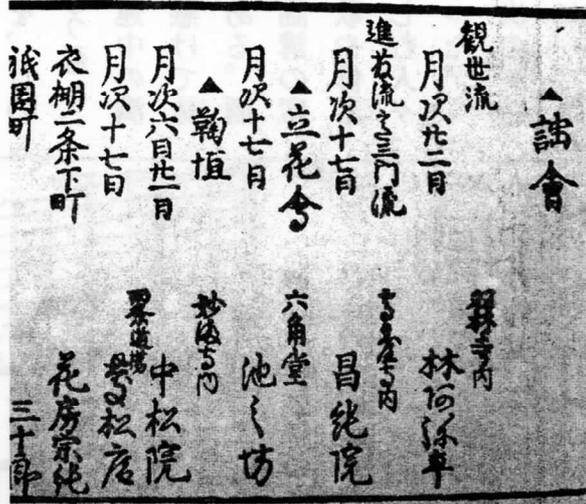
（鈴木吉三氏談『京観世をたずねて』「京観世の伝承と技法」CBSソニー一九八〇年）

三

式日を定めた月次の謡講を開いているのは、江戸前期には観世流と進藤流であつたが、寛文八年（一

六六八)、福王流五代目福王茂兵衛盛親が服部宗巴と改名して江戸より京都に隠居して後は、その流れを汲み、後世「京観世五軒家」と呼ばれる五家が月次の謡講を開き、近代に至る。この五家(林・井上・岩井・藪・浅野)は、京の市中に留まることなく地方でも門人を育て、謡人口の増大に重要な役割を担っていく(拙稿「京観世統紹―井上次郎右衛門家を中心に―」『神女大國文』十号一九九九年)。

そして、謡講は京においても、地方においても、一種のサロンを形成する。



元禄五年刊『萬民調寶記』
(『近世文学資料類從』勉誠社刊より転載)

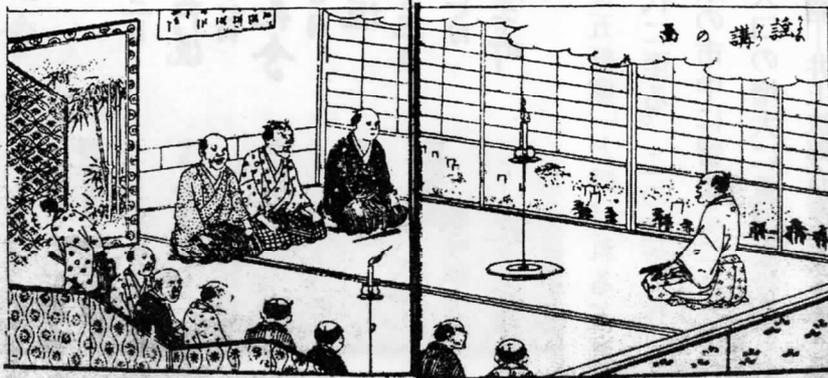
調講に酒のうへにて連中狂歌所望有れば
勅使さまも采女のかわらけ取しよりけもなひけ
もなひいかるけもなひ(享保十九年刊『置みやげ』)

右を詠じた由縁斎貞柳(承応三年〜享保十九年)は、狂歌中興の祖として知られる狂歌師。孫弟子にあたる仙果亭嘉栗(三井高業)が著した寛政二年刊『狂歌貞柳伝』によれば、父の榎並善右衛門(貞因)は貞徳より古今集の伝授を受け、誹諧を安原貞室に学び、狂歌を好んだという。家業は、船場御堂前雛屋町西南角に位置した菓子舗「鯛屋山城」。貞柳は貞因の嫡男。弟貞雅は浄瑠璃作者として著名な紀海音である。貞柳もまた、父に同じく少年の頃より歌道、連歌誹諧に親しみ、貞柳十九歳の時に成る『後撰夷曲集』(寛文十二年)には、貞因息良因の名で八首が載る。貞柳は四十七歳で家督を継ぎ(通称鯛屋善八)、家業に勤しむが、享保九年の大坂大火の後には、家督を養子貞竹に譲り、自らは高津の菩提庵に閑居して、茶湯、和歌、連歌など遊芸三昧の毎日を送ったこと

が知られている（大谷篤藏「翻刻『狂歌貞柳伝』」『文林』十二号）。さらに先の狂歌の詞書からは、貞柳の三昧の一つに謡があり、謡講の連中の一人であったことが知られるのである。

この日の謡講の曲は「采女」。采女のお酌と和歌によって、葛城王が怒りを鎮め心解けた話を、目の前に飛び交う盃と、酌み交わす連中の満面の笑顔に懸けて詠んだ狂歌である。酒が付き物の謡講の席はまた、狂歌や俳諧を詠んで楽しむ人々の場でもあった。

そして、次の笑話
が示すように、



天明七年刊『万葉小諷千秋楽』 謡講の図

さるれきれききの謡講の場へ、とひやうな、かしこうもない者来り、私も一番うたはんとて、狸々を上がかりやら下がかりやらしれぬ、四座のぬれぶしをうたへば、座中はらをか、へ、なにとそなたのうたひは、上が、りか下が、りかといへば、いやわたくしの謡は親が、りでござるといふた。

（元禄十四年刊『百成瓢箪』）

謡講の場は存外に開放的であり、通りすがりの軽はずみな「賢うもない者」がふらりと迷い込んで、聴場どころか謡場に乗り込む無礼講も許容する懐を持つていたものである。幕末から近代に入つては、修身修養の場としての比重を増していくが、

各々様のは謡、わたくしがは、へたひでござる。

（享保十一年刊『当流咄初笑』巻之五）

上手も下手も、通も半可通も、各々の在り方に任せて楽しみ、入場自由を貫く謡講の在り方が、近世を通じて謡人口の厚みを支えていたように思われる。

（了）